

農業用水の

節 水 に

ご協力ください！

- 県内では、6月以降まとまった雨が降っていないことから、農業用水が不足している状況にあります。
- 貴重な水を有効に活用するためにも、節水へのご協力をお願いします。

節水に効果的な取り組み



用水の掛け流しの防止



飽水管理の実践
(詳しくは裏面をご覧ください)

今後の栽培管理のポイント (中干し後の水管理)

宮城県栗原農業改良普及センター

- 6、7月の降雨が少なく、管内のダムの貯水率が低く推移しています。今後の天候によっては十分な農業用水を確保できなくなる可能性も考えられるため、限られた用水で実施可能となる「**飽水管理**」を行いましょう。
- 出穂期前後は稲体が最も水を必要とする時期です。出穂後30日頃までは「**飽水管理**（ほうすいかんり）」を行い、土壌を湿った状態に保ちましょう。

ほうすいかんり ～飽水管理とは～

従来の水管理方法に比べ、限られた用水で実施可能となります。また、間断かん水に比べ、より土壌を酸化的に保ち、根の活性が高まる管理法です。

✓**実施時期**：有効茎数確保後から出穂後30日頃まで。

✓**入水の目安**：水尻を閉めたまま自然落水させ、水田の足跡に水がなくなった頃、または、番水のタイミングで入水する。

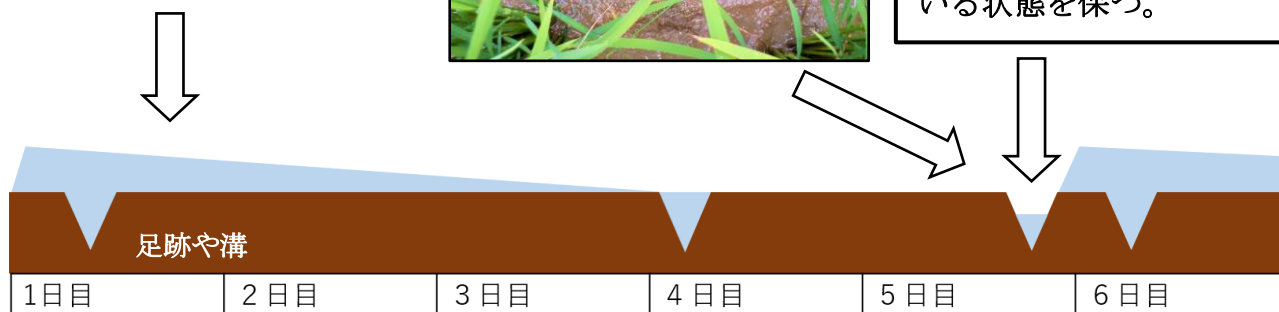
✓**効果**：通常の水管理では夜間に水温が下がりづらいため、稲体の温度も下がらず、光合成で作られた養分を呼吸で消費してしまいます。⇒**白未熟粒の発生を助長**一方で、「**飽水管理**」では、夜間に稲体の温度が下がるため、**水管理よりも白未熟粒の発生を抑制することが期待できます**。

重要：入水が的確に行えるように、水田の溝切りは必ず行いましょう。

水尻を閉め、田面が浸るくらい（ひたひた）になるように入水する。



自然に落水して、足跡や溝に水が無くなる頃、又は番水のタイミングで再び入水し、ほ場が湿っている状態を保つ。



※① 日数はあくまで目安です。地域やほ場の実情にあった水管理をお願いします。

図2 ほ場における飽水管理（ほうすいかんり）の方法

【地域で話し合い、限りある用水を有効に活用できるように工夫しましょう】

- 幼穂形成期（幼穂長1～2mm）から減数分裂期（幼穂長3～12cm）にかけて、最低気温が17℃以下の日が続く場合は深水管理を行い、幼穂を保護しましょう。